
或る朝の話。

黒猫林檎。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る朝の話。

【Nコード】

N76940

【作者名】

黒猫林檎。

【あらすじ】

或る朝の話。

- What is right? -

何が正しいのか。

どれが正しいのか。

何が間違っているのか。

どれが間違っていないのか。

何故違和感を覚えるのか。

何が違和感を覚えさせるのか。

*突発的に書いた話です。

きつと何の意味も在りません。
軽く読んで戴けると幸いです。

道路の反対側の車線、真ん中。

猫の死骸を見つけた火曜日の朝。

アスファルトの地面は濡れ、辛うじて赤は見えない。もうすぐ梅雨が明ける。如何にも先程まで雨が降っていたということを物語っている空色と、全く物語っていない日差しの強さ。その日差しは、橙よりの黄色の様な色で降り注いでいる。

車の助手席。

次々と不自然な軌道を取る反対車線の車の群を横目で見送って通り過ぎる。きつと其処を通る車に乗る人々は皆、目を逸らして通り過ぎるのだろう。

私も同じ。

其の地面に横たわる姿を確認すると目を逸らした。其れは右側を前方から後方へと流れていった。

ほかの景色よりも心なしかゆつくりと。

信号も無いのに車の列の流れで止まる。買い替えた新しい車は、エンジンの音があまりしない。新車の匂いと音のない不自然さ。黒い煙とエンジン音。胸の奥に響く低い音が懐かしい。

車が流れる。視界が開けた丁字路を曲がる。辺りに田が広がり、其の色彩が目を刺した。

青々とした稲、もう刈り取られてしまった稲。

生きているもの、もう生きていないもの。

生きているものと生きていないものは隣同士で、常に共存している、筈であったのに。どうして猫の死骸に違和感を覚えるのか。彼^{あれ}は生きていないもの。私たちは生きているもの。

隣同士、遭遇しただけ。

只其れだけではないのか。

なんだか、現代ではほぼ見る事のなくなってしまうた稲の色彩

が目に痛く成ってきた。

ふっと、空を見上げる。

灰色の雲。 橙の日差し。 黄色の光の筋。

窓から入る風は水気を運び、それは、また雨の降りそうな気配で。 いつの間にか視力が落ちてしまった両の目を凝らす。

以前、此処で虹を見たことがあった。 此の様な天気なら見えるかもしれない。 だが私の目に映ったのは淡い虹色ではなく、雲間を抜けるくすんだ青色だった。 動く車内から其の青を追う。 段々と後方に流れていくにつれ、青色が濃く深く成っていく気がして。 はっと気づいた其の空は先程の猫の模様に似ていた。

目で追っていく限界が近づいてくる。 首の片側が引つ張られて痛い。 目を離そうとした其の刹那、辛うじて目で追った其の色は、雲間に見えた青は、一瞬にして消え去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7694o/>

或る朝の話。

2010年11月7日20時37分発行